

『萬葉集詁』について

——五井蘭洲説の検討——

北谷 幸 冊

はじめに

『萬葉集詁』（以下「集詁」と略称する）には、五井蘭洲が自らの説を、「愚案」と断つて掲げている箇所がある。それらは、自説の前に語注をあげての場合と、契沖や北村季吟らの説くところをあげての場合とがあるが、「愚案」と断つての解注は蘭洲が自説の開陳にそれなりの意欲や自信を持つてのものと思われる。ちなみに、「愚案」と断る蘭洲説が見える語数は、次のとおりである。

天文時候	四	地理宮室	七	鬼神人倫支體	九	草木穀菜	九
鳥獸蟲魚	一	服食器財	八	態藝事爲	一〇	虚詞助辭	一四

合計六二語は、総語彙数の三パーセント弱にあたり、多いとは言えないが、説くところの正否はともかく、「愚案」に蘭洲の解説の仕方や、説の特徴を見ることができるといえる。蘭洲説のなから次の五項について検討する。

一

○いまのをに

(集帖) いまのをに 年の緒又をつゝの説あり。愚案には今の世になり。をつゝは現なり。(天文時候)

この語は集中一例。大伴家持の長歌に、

皇祖すのぎの 遠みよき御代みよにも おしてる 難波なだはの国に 天あめの下 知らしめしきと 今のをに(伊麻能乎爾) 絶えず言ひ

つつ かけまくも あやに恐かしこし …… (卷二十四三六〇)

がある。

萬葉集目安に、「伊麻能乎爾 イマノヲハ今ノ世也。」と注するのをそのまま引用する拾穂抄は、「いまのをに 見安云今の世也。」と解説している。これらの「今の世」説に対して、管見には、

今のをにたえすいひつゝ 今のをは緒と云心也。年のつゝくを年の緒と云心にて、たえすとはつゝけたりときこえたり。

とある。代匠記には、(初稿本)にこれを引いて、

今のをにたえすいひつゝ 長流かいはく。今のをは、緒といふ心なり。年のつゝくを年の緒といふ心にて、たへすとはつゝけたりときこへたりといへり。

とし、(精撰本)では、

イマノヲニハ、ヲトヨト同韻ノ字ナレハ、通シテ今ノ世ナリ。又年ノ緒長クトヨメルハ、長クツ、ケル意ナレハ、准ラヘテ思フニ、昔ヨリ今ノ緒ニ絶スト云ヘルニモヤ有ラム。

と説いている。

この語、萬葉考が、「伊麻能与尔。今本、与を乎に誤る。よて改めつ。」と、誤字説を出してより、略解・古義はこれに従っている。

現在の注釈書のなかでは、全釋に、

乎は與の略字、与を誤つたのであらう。

とあるをはじめ、萬葉考以来の説を踏襲するものが多いが、全註釋では、文字の通りに解して、

伊麻能乎尔 イマノヲニ。イマノヲは、年ノ緒、息ノ緒などと同じく、今を緒に譬えた言い方で、次に、絶エズ言ヒツツとあるので、それが證明される。今という時が續いているとする思想である。

という。全訳注にも、「今の緒」と解して、これを「年の緒に準じた家持の造語か。今。」と注記し、全注（木下）は、今のをに 今ノヲは現在の意であろうが、ヲの語性不明。あるいは年ノ緒などの語から連想して家持が作った語か。

小学館新編古典全集には、

現在。あるいは年ノ緒などの語から連想して作った家持の新造語か。

と説いている。

ちなみに、トシノヲには、

年之緒 四一五八七（あらたまの 年之緒長 我も思はむ）

年緒 三―四六〇（あらたまの 年緒長久 住まひつ）・九―一七七四（母の命の 言にあらば 年緒長 頼み過ぎ

むや）・十一―二〇八九（あらたまの 年緒長 思ひ来し）・十一―二五三四（あらたまの 年緒長 我が恋ひ居らむ）・十

二―二八九一（あらたまの 年緒長 かく恋ひば）・二九三五（あらたまの 年緒長 何時までか）・三二〇七（あらた

まの 年緒永 照る月の）・十三―三三三四（行き向かふ 年緒長 仕へ来し）・十九―四一五四（行き変はる 年緒奈

我久 しなごかる 越にし住めば）・四二四四（あらたまの 年緒長 我が思へる）・四二四八（あらたまの 年緒長久

相見てし）・二十一―四二九八（我は参る来む 年緒奈我久）・四三〇八（天の川 隔りにけらし 年緒奈我久）

との例がある。全註釋が説くように「絶えず」に続く点を考慮したいが、右の例の「年の緒」の語はすべて、ナガクに續いている。家持造語説に従うべきか。いずれにしてもこの語の意は、「今の世に」・「今の世代に」であろう。

また、「いまのをつつに」の語は集中四例（八一三・三九八五・四〇九四・四二二二）ある。代匠記（初稿本）ではすでに「今のをに」の注につづけて、

今案、第五第十七第十八に、いまのをつゝとよめり。若此をつゝの畧にて、今のうつゝの心にや。

と言っている。ヲは「緒」、「をつゝ」はウツツに通じ、「現在」・「現実」の意である。例えば、

現には（現者）言も絶えたり 夢にだに 継ぎて見えこそ 直に逢ふまでに
（卷十二―二九五九）

…… しまたへの 袖返しつづ 寝る夜落ちず 夢には見れど 現にし（宇都追尔之） 直にあらねば ……

（卷十七―三九七八）

がある。

蘭洲は「天文時候」の部で、

をつゝ 今のをつゝと有。今みる現在の体なり。

との注を付しており、蘭洲の説は先行の説に拠りながらも、「いまのを」・「をつゝ」の両方の語を勘案した上での当を得たものと思われる。

二

○うまひと・こまひと

（集話） うまひと 君子良家也。契云、こま人とよむへし。こま人は声ふくれたる故なり。よりにて爰に肥人とか

けり。愚案、狛の字の誤なり。 （鬼神人倫支體）

こまひと 肥人と書。愚案、狛の字の誤りか。くはしくうま人の所にあり。 （鬼神人倫支體）

小学館古典全集本によって、右の注に該当する歌をあげれば、「うまひと」に次の二首があり、

みこも刈る 信濃の真弓 我が引かば うま人さびて (宇真人佐備而) 否と言はむかも (卷二一九六)

あさりする 漁夫の子どもと 人は言へど 見るに知らえぬ うまひとの子と (有麻必等能古等)

(卷五—八五三)

「こまひと」については、

肥人の (肥人) 額髪結へる 染木綿の 染みにし心 我忘れめやへに云ふ、「忘らえめやも」

(卷十一—二四九六)

と詠まれている。

『日本書紀』には、

(神功紀摂政元年三月条)

……

宇麻比等は

于摩誓吾どちや

親友はも

親友どち

いざ鬪はな

……

(仁徳紀二二年正月条)

于磨臂吾の

立つる言立

儲弦

絶え間繼がむに

並べてもがも

とあるウマヒトは、「貴人」の意。九六番歌・八五三番歌のウマヒトは、集註の解注にいう「君子あるいは良家の人」の意と理解できる。蘭洲が「うまひと」・「こまひと」の二項で自説をあげているのはいずれも二四九六番歌についてのものとみえる。この歌、拾穂抄には、

うま人のひたいかみゆへるそめゆふのそめしこゝろをわれわすれやも

と読み、「うま入」の注には、見安・八雲御抄を引いて、

日本紀二君の字をうまひととよめり、前にうま人さびてと有いこえひとこえたる人にやいこま人こまかにうつ

くしき心なる也、見安ニハ高麗人と注せり如何八雲御抄にははた人とあり古本肌人とかけるにや是ハ八秦の氏人

にや。

と述べている。蘭洲が参照しているであろう管見には、

肥人を、こゑ人とよめれ共、其義なし。うま人とよむへし。鳥も魚も、獸の肉も、肥タルハうまき也。うま人とよむへきなり。

といい、「うまひと」との訓を後に「コマヒト」と改めている代匠記の（初稿本）に、

うまひとのひたひかみゆへる　うま人は、高貴富有のよき人なり。良家、君子、摺紳、これらを日本紀にうまひとよめり。第二巻に、久米禪師かうま人さひてとよめる哥に注し單ぬ。又第五巻に帥大伴卿の家にて、みなのよみける三十三首の梅の哥の中の作者の名にも、少令史田氏肥人あり。鳥も魚も獸の肉も、肥たるはうまきことほりなり。長流か抄に、こえ人とよめるを義なしといへり。今の本にはこま人とよめり。高麗人なるへし。いかてこま人とはよめりけむ。今朝鮮の人のわたりくるを見るに、いたくふつゝかにこえふとりたるがおほければ、その心をもてやよめりけむ。たゞうま人にしたかふへし。

（精撰本）には、

肥人ヲコマヒト、點セルハ高麗人ノ意歟。肥ヲコマトヨメル意イマタ知ラス。今彼國ノ人ヲ見ルニ、イタクフツ、カナルマテ肥タルカ多ケレハサル意ニヤ。古點ニコエヒト、ヨメルハ一向義ナシ。今按、ウマヒトノト義訓スヘキ歟。鳥獸ノ肉モ肥タルハウマキ理ナリ。

と注している。「肥人」の訓は、古写本においてもすでにさまざまであり、校本萬葉集によると、

細井本　　コエヒト（左ニ「コマヒト」）

西本願寺本・温故堂本　「肥」の左ニ「コエ」

神田本　　コヒヒトノ

金沢文庫本・大矢本・京都大学本　コマ（京都大学本では、「肥」の左に「コエ」）

類聚古集　こえ人の

神宮文庫本 コエヒトノ（左ニ「コマヒトノ」）

広瀬本 コエヒト

とある。類聚名義抄（観智院本）に「肥^{コマカ}」との訓があるところからも、コマヒトとの訓みは可能である。

蘭洲は、肥は「狛の字の誤り」としているが、同様の説は、萬葉考にみえ、「狛を肥に誤りしにて、本は狛なりけり。」と説かれている。萬葉考よりも早く、蘭洲が「狛」の字の誤りとするのは新見であるが詳細な注記のないのが残念である。

この語、現在の注釈書類では、

全註釋 ヒビト 九州に居住した異風俗の種族。

私注 ヒヒト 肥の國の人。

注釋 コマヒト 九州玖磨の人。

岩波古典大系 コマヒト 玖磨人。九州玖磨地方の人。

小学館古典全集 コマヒト 上古、肥後国玖磨地方（熊本県球磨郡、人吉市の一帯）に住んだ異民族の一種か。

新潮古典集成 コマヒト 熊本県玖磨地方の人か。

全訳注原文付 コマヒト 熊本県玖磨地方の人。なぜコマというか不明。「肥」はコマヤカの意。

釋注（伊藤） コマヒト 肥後の国球磨地方（熊本県球磨郡・人吉市）の人であろう。

小学館新編古典全集 コマヒト 上古、南九州に住み異人種と見なされた人々。その本拠地は不明。

とあり、コマヒトと訓んで、九州球磨地方の人とするのが通説となっている。

○はなかつみ

(集誌) はなかつみ 菰也。愚案、菰には花なし。花菖蒲ならん。

(草木穀菜)

この語は、集中一例、

をみなへし 佐紀沢さきさばに生おふる 花かつみ(花勝見) かつても知らぬ 恋もするかも

(卷四一六七五)

とある。蘭洲が最も多くその説を引用している拾穂抄には、「童蒙抄云、花かつみとは花さきたる蔣くそをいふ。」とあり、童蒙抄には、蘭洲が引用しているとおり、卷四一六七五番歌をあげて、「はながつみとははなさきたるこもをいふ。」との注がある。代匠記(初稿本)に、「かつみはこもなり。」、(精撰本)にも同様に、「花カツミハ菰ヲ云ト云ヘリ。」と説いている。契沖の説は、「こもをば、かつみといふ。」とある能因歌枕や童蒙抄、さらには、

花かつみ 眞まこもの名なり。先達説々あれとも、とかく眞こものことく聞えたり。

と説く、長流の説(管見)を踏まえてのものであろう。蘭洲が、「菰也」と、その説を挙げているのは、これら先行の説をいったん紹介したものである。

古今和歌集に、

みちのくの あさかの沼のはなかつみ かつみる人に 恋こひや渡らむ

(卷十四・恋歌)

と詠まれていることも関わって、ハナカツミについては、まこも・のはなしようぶ・花菖蒲・あかぬまあやめ・でんじ草など、いろいろな説がある。

ちなみに、略解は、

はながつみは和名抄酢漿加太是と同じ類にて、水に生る物也。四ひらにて葉則花の如くなれば花がつみといふな

らむと翁はいはれき。されど花といふべくもなきもの也。陸奥にて今花菖蒲に似て花の四ひらなるものをつみと言へり。これぞまことのものなるべき。

と説くが、攷證（岸本由豆流）は、「證もなく、をさなき説なり。」としてこれを退けて、

かつみとは菰の一名にて、花かつみとは菰の花咲きたるをいふべし。

と言っている。また、萬葉集品物解（鹿持雅澄）には、

賀茂真淵翁曰く、花カツミは勝見といふがもとの名にして、それに花のさきたるを花勝見といふ。橘に花橘といふが如し。さてコモをカツミと云ふよし云へるは、もとよりカツミはコモの一種なれば、やがて直にコモともいへるなり。

とあるが、井上新考が、「赤沼あやめ」と説く白井光太郎の説を引いて、

花勝見は野生の花菖蒲にて日光にては赤沼アヤメといふ。……。あやめより小さく五六月頃に花さくものにて花の色は紫赤にて今も或地方にては花ガツミといふとぞ。

と述べ、以来この説を支持する研究者が多い。ところが、現在の注釈書にあたってみると、その解説は、例えば、

全註釋 野生の花菖蒲の一種。

私注 アヤメの一種だらうと言はれてゐる。

注釋 花あやめ（又は花しやうぶ）。

窪田評釋 白井光太郎氏の研究により、野生の花菖蒲の一種で、日光地方では「赤沼あやめ」と稱してゐる物だといふ。

岩波古典大系 未詳。花菖蒲の一種。まこもその他、説がある。

小学館古典全集 未詳。花あやめ・花しようぶの類か。

新潮古典集成

花菖蒲の類か。

全訳注原文付

「かつみ」はマコモ。「花かつみ」はアヤメか。

全注（木下）

今日の何にあたるか不明。

釋注（伊藤）

未詳。花菖蒲の類か。中古以後は真菖と考えられていた。

小学館新編古典全集

未詳。花しょうぶ・花あやめの類か。

のように、歯切れはよくない。

再度蘭洲の説の検討にもどつて、蘭洲が否定している「菰」についてみれば、牧野富太郎『日本植物図鑑』の「まこも」の項には、括弧付きで（ハナカツミ）とあるが、それは小さな花を付けるものであるとの解説がある。「菰説」は蘭洲が採っていない説であるから、花のあるなしはともかくとして、花菖蒲についてみれば、同じ牧野『植物図鑑』に、

ハナシヨウブ

〔アヤメ属〕

ノハナシヨウブを原種として改良された園芸品で、水辺など湿った地に栽培される多年草。高さ60〜80 cm 群生する。葉は隆起した中脈をもつのが特徴。花は初夏、大きいもので径15 cm 位に達し、紫、白、絞りなどの色がある。原種とは、はえる所や、全体に原種の方が細長いことで、区別できる。和名は、花の咲くさといも科の菖蒲という意味。

ノハナシヨウブ

〔アヤメ属〕

日本各地、及び朝鮮、中国東北部、東シベリアに分布し、酸性の土壤の日当たりのよい湿地や草原に生える多年草。ハナシヨウブの原種。高さ60〜120 cm。4種のアヤメ属のうち本種だけが葉の主脈がはっきり見える。花は初夏、径10 cm 位。和名野花菖蒲は野生のハナシヨウブの意味。中部地方ではドンドバナといわれる。種小名は野

生の意。

との解説がある。植物学上は、ハナシヨウブ・ノハナシヨウブ・シヨウブはそれぞれ別種のものであるようである。自らはマコモであろうと説いたうえで、ハナシヨウブ説を紹介している松田修『増訂萬葉植物新考』には、

ノハナシヨウブ説をみると、この説は、陸中鹽竈神社の祠官、藤原知明が「花勝見考」（寛政十年刊）に最初に述べられているところで云々。

とあるが、蘭洲の言うところと藤原知明の説くところが同じ植物を指してのものとすれば、花菖蒲説は集話の方が先であり、花菖蒲説は蘭洲に始まるといえよう。

四

○あきつはの

（集話） あきつはの 袖ふる又あきつはの匂へる衣とも有。愚案、碧羅衣なり、蜻の羽にたとふ。（鳥獸蟲魚）

蘭洲が「袖ふる又あきつはの匂へる衣とも有」と注記する作品に次の二首、

あきつはの（秋津羽之） 袖振る妹を 玉くしげ 奥に思ふを 見たまへ我が君 （卷三―三七六）

あきつはに（秋都葉尔） にほへる衣 我は着し 君に奉らば 夜も着るがね （卷十一―三〇四）

がある。

これらの歌の「秋津羽之」・「秋都葉尔」の注、拾穂抄には、

（三―三七六）

あきつはの 袖ふる妹を仙曰秋つ羽とハとんハウの羽也うすき物にたとふる也嬋娟たるおとめなどのしなやかなる袖のけしきによそふる也羅綺の重衣たるなといへるも其心同かるへし。

(十一三〇四)

あきつハに匂へる 仙曰秋津とハ蜻蛉也あきつといふをあつまにはえぞと云也えハ赤き也赤羽といへる也されハあきつはに匂へるといへるハあけの衣也愚案順和名云赤卒アカエンハ一名絳驪蜻蛉之小而赤也またせハイまたさハイまつらハ皆同奉らは也あきつはにほへるうつくしき衣を我ハ着すして君にまいらせハよるもきる事あらんさあらハ夜逢もやせんとなるへし一説あきつはハもみちの事云々如何。

とあるが、代匠記(精撰本)では、二三〇四番歌の「アキツハニホヘルコロモ」を注して、

秋都葉ニニホヘル衣トハ紅葉ノ如ナル紅ノ衣ト云ナリ。第三ニ、湯原王宴席歌ニ讀玉ヘル、秋津羽ノ袖ト云ニハ替レリ。其故ハ秋相聞ナルニ字ヲ秋葉トカキテ、此外ニ秋ノ詞ナケレハ、紛ナキ事ナリ。

という。全釋には、この語を注して

○秋津葉爾——卷三にも秋津羽之袖振妹(三七六)とあつて、蜻蛉羽の義であるが、ここは秋の部に入れてあるから、秋つ葉即ち紅葉のやうな赤い衣をさすのだらうとする説もある。紅葉を秋津葉と言つた例は他になく、又蜻蛉は秋の虫であるから蜻蛉の羽のやうなと解すべきではあるまいか。

とある。これに対して、岩波古典大系本の二三〇四番歌の頭注には、

原文、秋都葉。普通蜻蛉の羽と解するが、蜻蛉はアキツで、都は清音ツの仮名。ツとツの清濁は、かなりよく弁別されるので、アキツハという語例は他にないが、秋の葉と解しておく。

とあり、小学館古典全集本は、「秋の紅葉。ツは連体格の助詞。」として、「秋つ葉に にはへる衣」と書き下し、「秋の紅葉の色に染まった衣を……。」と現代語訳している。

岩波古典大系・小学館古典全集らに従つて、三七六番歌の「秋津羽」はアキツハ、二三〇四番歌の「秋都葉」はアキツハと訓むべきところである。早く契沖がこのことを説き、それに先だつて長流(管見)が、

第十巻歌に、秋津葉にほへる衣とよめるは、正しく秋の木葉なり。紅なる衣といふ心なり。女の衣には、紅を賞翫すれば、秋つ葉の袖ときこえたるにや。と説いている。

蘭洲が説く「碧羅衣」の「碧羅」は「みどりのうすぎぬ」（時代別国語大辞典上代編）の意であるが、

三七六 秋津羽之は、アキツハノで、「秋津羽之 袖」は、とんぼの羽のように薄く透き通った衣の袖。

二三〇四 秋都葉尔は、アキツハニで、「秋津葉尔 尔宝敵流衣」は、秋の木の葉のように美しく染めた衣。

と、區別して注すべきところである。

「袖ふる又あきつはの匂へる衣とも有。」と例歌をあげるに続けて「碧羅衣なり。蜻の羽にたとふ。」と説く蘭洲は、三七六番歌の「秋津羽之」・二三〇四番歌の「秋都葉尔」を一緒にして解しているが、集話のなかにその説を多く引用している管見や代匠記のこの項は見えていないのだろうか。先行の説にあたりながらも、ここでは無視したとも考えられる。

五

○しかすかに

（集話） さすか也。愚案に、さすかと異也。しらす白の言の省ける也。才十に出たるは、分明にしらす白にと聞

ゆ。

（虚詞助辭）

「しかすかに」（「しかすがに」）の語を含むものに、次の十二首がある。

…… あそそには かつは知れども しかすがに（之加須我仁） 黙もえあらねば 我が背子が 行きのまにまに

追はむとは 千度思へど ……

（卷四—五四三）

梅の花 散らくはいづく しかすがに(志可須我尔) この城の山に 雪は降りつつ (巻五―八二三)

荒磯越す 波は恐し しかすがに(然爲蟹) 海の玉藻の 憎くはあらずて (巻七―一三九七)

うち霧らし 雪は降りつつ しかすがに(然爲我二) 我が家の園に うぐひす鳴くも (巻八―一四四一)

うちなびく 春さり来れば しかすがに(然爲蟹) 天雲霧らひ 雪は降りつつ (巻十一―一八三二)

梅の花 咲き散り過ぎぬ しかすがに(然爲蟹) 白雪庭に 降りしきりつつ (巻十一―一八三四)

風交じり 雪は降りつつ しかすがに(然爲蟹) 霞たなびき 春さりにけり (巻十一―一八三六)

山の上に 雪は降りつつ しかすがに(然爲我二) この川柳は 萌えにけるかも (巻十一―一八四八)

雪見れば いまだ冬なり しかすがに(然爲蟹) 春霞立ち 梅は散りつつ (巻十一―一八六二)

妹と言はば 無礼し恐し しかすがに(然爲蟹) かけまく欲しき 言にあるかも (巻十二―二九一五)

三島野に 霞たなびき しかすがに(之可須我尔) 昨日も今日も 雪は降りつつ (巻十八―四〇七九)

月数めば いまだ冬なり しかすがに(之可須我尔) 霞たなびく 春立ちぬとか (巻二十一―四四九二)

拾穂抄では、一八三六・一八四八・一八六二・四〇七九・四四九二の五首を除いて、七首すべて、この語を「さすがに」と注記している。

代匠記(初稿本)では、五四三・一四四一・一八三二・二九一五の四首、(精撰本)では、五三四・一三九七の二首について、「さすがに」との注を付している。ちなみに、五四三番歌においては、

(初稿本) しかすがにはさすかになり。

(精撰本) シカスカニハサスカニナリ。然ラシカトモサトモヨメリ。

とあるが、代匠記においては注を施していない歌についても一様に理解すべきであろう。

この語は「然爲蟹」との用字が多く見られるとおり、もともと、シカは「然」、スは「爲」(サ変動詞・終止形)、カニ

(ガニ)は助詞で、「そうであるが、しかし」の意の接続助詞とみる。

蘭洲が、拾穂抄・代匠記の説くところを退けて、「しらす白の言の省ける也」との自説を挙げているのは唐突に過ぎる説と言うべきか。

おわりに

蘭洲の説については、さきに先行の説の提唱者名あるいは書名をあげた後に「愚案」を掲げて一語の注としているものについて検討した(拙稿『萬葉集話』について——その方法論的考察——)、『千里山文學論集』第29号(昭和58年12月)が、特に前に提唱者をあげていないものも、蘭洲が自説とする前に置かれているのは契沖や季吟の説が多いことが確かめられる。

「愚案」との表記は拾穂抄に倣ったものかと思われる、管見・代匠記を細かく見ているであろうことは認められるが、蘭洲がそれらの説を退けて自説を立てているものも、簡略すぎて物足りないものが多い。辞書的な書である集話の性格上やむを得ない面もあるが、当時であつてこうした書物を作りあげた著者の意欲こそを評価すべきであろう。